

# 就労移行支援におけるアセスメント研究のギャップ検証

## 国内研究の現状と限界（「実証研究」と呼べるものの件数と質）

日本における就労移行支援のアセスメント研究は、実践報告（ケース報告）や簡易な実態調査が中心であり、統計的手法による検証を伴う本格的な研究は著しく少ないのが現状です。研究者自身も指摘するように、標準化され信頼性・妥当性が検討された職業準備性などの評価尺度は開発されておらず、**当事者の体験に基づいて作成された尺度も存在しないと報告されています**<sup>1</sup>。つまり、就労移行支援の現場で用いる自己記入式のアセスメントツールは極めて限られており、現場で活用される場面も多くないのが実情です<sup>2</sup>。そのため、支援者による観察記録や面接に頼る評価が中心で、利用者本人の主観を直接反映できる標準化ツールが不足しています<sup>3</sup><sup>4</sup>。

過去10年ほどを振り返っても、**アセスメント尺度の開発・検証といった「実証研究」に該当する論文はごくわずか（ほとんど皆無）**です。例外的な試みとして、森谷就慶ら（2014年）は国際生活機能分類（ICF）に基づく**精神障害者就労支援尺度（JSM-ICF）**を開発し、前向き調査によって就労支援のあり方を検討しました<sup>5</sup>。その結果、就労に至った人々では「コミュニケーション」や「対人関係の構築」に困難が少ない傾向が示され、対人スキルに焦点を当てたインターンシップや職場実習型の支援の重要性が示唆されています<sup>6</sup>。しかし、この研究は**精神障害分野における単発の学位論文研究**であり、就労移行支援事業全般のアセスメント構造を実証的に解明したものではありません。また、この成果が実際の標準ツールとして普及したわけでもなく、以降も同様の尺度開発研究はほとんど見当たりません。

一方、実践現場レベルの取り組みは散発的に報告されています。例えば、厚生労働省の研究班（前原ら）は2019年度に**国内外の文献収集や全国調査を通じ、就労アセスメント手法の活用実態と課題**を整理しました<sup>7</sup><sup>8</sup>。この調査では全国334か所の障害者就業・生活支援センター等に予備調査を行い、**必ずしも体系立ったアセスメントが十分に実施されていない現状が確認されています**<sup>9</sup><sup>10</sup>。また、職業リハビリテーション分野の研究会や実践発表（例：「職業リハビリテーション研究・実践発表会」）では、既存ツール（例えばTEACCHやTTAP等）の活用事例やチェックリストの試作報告が散見されます<sup>11</sup><sup>12</sup>。しかしこれらは**ケーススタディや実践的取り組みの紹介が中心**であり、尺度の構造的妥当性や信頼性を厳密に検証する学術研究とは言い難いものです。

総じて、日本国内では「**アセスメント構造**」に焦点を当てた学術的・実証的研究は極めて少なく、質的にも国際標準（COSMINなど）に沿った尺度開発・評価研究はほぼ行われていないと言えます<sup>1</sup>。過去10年で学術誌に掲載された関連研究は**数件あるかないか**であり、就労移行支援の評価指標そのものを統計的手法で検証した研究は皆無に近い状況です。

## 海外研究の動向（アセスメント自体の科学的検証の事例）

欧米に目を向けると、**職業リハ領域のアセスメント手法に関する実証研究は日本よりはるかに蓄積されています**。支援対象や目的に応じて多様な評価ツールが開発・検証されており、信頼性・妥当性に関する報告も数多く存在します。例えば、米国では職業評価プロトコル（Vocational Assessment Protocol, VAP）の心理測定学的特性（内部一貫性信頼性や構成概念妥当性など）を報告する研究が行われており<sup>13</sup>、特定の対象向け職業アセスメントツールの開発と標準化が進んでいます<sup>14</sup>。また、新卒者の**Work Readiness Scale**（就業準備度尺度）を開発・検証した研究<sup>15</sup>や、特定職種向けの職業スキル評価法の研究など、**尺度開発研究の事例が豊富**です。

特に精神障害分野で国際的にエビデンスの確立したIPSモデル（Individual Placement and Support）では、**利用者の希望・関心といったナラティブ（個人の語り）を重視したアセスメント**が中核となっています。IPSモデルは「サービス利用の事前条件なし」「職探しの迅速化」「訓練は職についてから実施」「すべての支援は利用者の好みに基づく」など8原則を掲げており<sup>16</sup>、従来型と比べて約2倍の就労率向上をもたらすことが示されています（Bondらのメタ分析など）<sup>16</sup>。この成功の背景には、**利用者本人の語り・希望を評価に組み込み、強みを活かすストレングスベースのアセスメント**が効果的に機能していることが指摘されています<sup>16</sup>。実際、IPSでは支援専門員が初期面談で**Career Profile**と呼ばれる包括的アセスメントを作成し、利用者の職歴・興味・サポート要望等の物語を引き出して支援計画に反映します<sup>17</sup>。このように**ナラティブを評価体系に組み込む手法は欧米では有効性が認識**されており、リハビリテーションカウンセリングの文献でも物語療法的アプローチの有用性が報告されています<sup>18</sup>。

さらに欧米の研究では、「**環境要因（Environmental Factors）の評価統合**」が重視されています。WHOの国際生活機能分類(ICF)に基づき、職業リハビリテーション領域のコアセット（包括的項目集）が策定され、環境調整や支援状況を含めた包括評価の枠組みが検討されています<sup>19</sup>。例えば脊髄損傷者の職業リハにおけるICFコアセット妥当化研究では、患者視点で環境因子の重要性が確認されており<sup>20</sup>、コンテンツバリディティの観点から環境項目の充実が提案されています。実証研究としては、**環境要因が就労転帰に与える影響を統計的に分析**した報告もあります。中等度以上の外傷性脳損傷患者100名を2年間追跡した研究では、**友人からの社会的支援やリハサービスの調整充実度、自家用車で移動できる環境**といった環境要因が就労復帰に有意な影響を及ぼすことが示されました<sup>21</sup>。具体的には、「友人の支援がある」「包括的なヘルスケア調整をそれほど要しない」「運転再開できている」などの要因があると就労率が高かったと報告され、リハ専門職は職業復帰プラン策定時に環境要因の役割を認識すべきだと結論づけています<sup>21</sup>。このように、**欧米では個人要因だけでなく職場環境・社会資源といった環境要因を含めた評価研究が進んでおり、評価体系の有効性や網羅性を実証する文献も蓄積**しています。

## 結論：「ほとんど存在しない」という記述は妥当か？

以上の調査から、「日本の就労移行支援において、アセスメント構造に関する実証研究はほとんど存在しない」という当初の主張は、概ね妥当であると判断できます。国内では散発的な実践報告や限定的なアンケート調査こそ見られるものの、**アセスメント指標そのものの構造的妥当性・信頼性、さらには環境因子の統合などを厳密に検討した研究は皆無に近い状況**です<sup>1</sup>。わずかに存在する先行研究も、特定領域（例：精神障害分野）の試験的な尺度開発<sup>5</sup>に留まり、就労移行支援全般の評価体系を包括的・実証的に扱ったものではありません。JEEDの研究紀要や厚労科研費の報告書を調べても、評価手法の紹介や現状調査はあっても、**統計学的手法を駆使してアセスメントの構造や効果を解明した学術研究は見当たりません**。したがって、「ほとんど存在しない」という表現に大きな誤りはなく、研究ギャップの指摘として適切だと言えます。

もっとも、表現をより正確にするなら、「**〇〇という観点の実証研究は皆無**」と具体化することが望ましいでしょう。例えば、本研究計画で強調する視点に合わせて「日本の就労移行支援において、**アセスメント指標の構造的妥当性・信頼性、および利用者の環境要因を組み込んだ評価手法の有効性に関する実証研究は皆無に等しい**」と記述すれば、先行研究の欠如を一層明確に示せます。<sup>1</sup>このような言い回しにより、「ほとんど存在しない」ことの具体的根拠が伝わりやすくなり、研究ギャップの正当性をより説得的に裏付けることができるでしょう。

---

<sup>1</sup> nivr.jeed.go.jp  
[https://www.nivr.jeed.go.jp/vr/p8ocur00000088ig-att/vr26\\_essay23.pdf](https://www.nivr.jeed.go.jp/vr/p8ocur00000088ig-att/vr26_essay23.pdf)

<sup>2</sup> <sup>3</sup> <sup>4</sup> （原著）「就労移行支援利用者が主観的困難感をもつ就労上の対処行動リストの作成—デルファイ法による専門家の意見の活用—」が学会誌『職業リハビリテーション』に掲載されました | LITALICO研究所  
[https://note.com/litalico\\_lab/n/n66a8bf022e16](https://note.com/litalico_lab/n/n66a8bf022e16)

- 5 6 23530743 研究成果報告書  
<https://kaken.nii.ac.jp/file/KAKENHI-PROJECT-23530743/23530743seika.pdf>
- 7 8 9 10 mhlw-grants.niph.go.jp  
[https://mhlw-grants.niph.go.jp/system/files/download\\_pdf/2019/201906039A.pdf](https://mhlw-grants.niph.go.jp/system/files/download_pdf/2019/201906039A.pdf)
- 11 12 第28回職業リハビリテーション研究・実践発表会発表論文集 テーマ12  
[https://www.nivr.jeed.go.jp/vr/h3iskd0000001x5z-att/vr28\\_essay18.pdf](https://www.nivr.jeed.go.jp/vr/h3iskd0000001x5z-att/vr28_essay18.pdf)
- 13 An Occupational Therapy Work Skills Assessment for Individuals ...  
[https://www.researchgate.net/publication/10674728\\_An\\_Occupational\\_Therapy\\_Work\\_Skills\\_Assessment\\_for\\_Individuals\\_with\\_Head\\_Injury](https://www.researchgate.net/publication/10674728_An_Occupational_Therapy_Work_Skills_Assessment_for_Individuals_with_Head_Injury)
- 14 Validation of vocational assessment tool for persons with substance ...  
<https://pmc.ncbi.nlm.nih.gov/articles/PMC5248421/>
- 15 [PDF] Developing a measure to assess work readiness in college graduates  
<https://files.eric.ed.gov/fulltext/EJ1236283.pdf>
- 16 jssw.jp  
<https://www.jssw.jp/conf/65/pdf/C07-01.pdf>
- 17 [PDF] 3.4 the individual placement & support model - Homeless Hub  
<https://homelesshub.ca/sites/default/files/Ch3-4-MentalHealthBook.pdf>
- 18 [PDF] DELTA RAIDERS: A STUDY OF COLLECTIVE ... - K-REx  
<https://krex.k-state.edu/dspace/bitstream/2097/9793/1/AaronBlackman2011.pdf>
- 19 ICF Core Sets for Vocational Rehabilitation  
<https://www.icf-research-branch.org/icf-core-sets-projects2/diverse-situations/icf-core-sets-for-vocational-rehabilitation>
- 20 Validation of the ICF Core Set for Vocational Rehabilitation from the ...  
<https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/25924018/>
- 21 Impact of personal and environmental factors on employment outcome two years after moderate-to-severe traumatic brain injury - PubMed  
<https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/24002317/>